

「ラ・カリカチュール」とはどんな新聞か (1/2)

宮 原 信

A description of *La Caricature*

Makoto MIYAHARA

Abstract

The purpose of this paper is to describe as concretely as possible *La Caricature*, a French satiric journal published in Paris every Thursday from November 1830 to September 1835.

Who read and appreciated the journal? What were the principal characteristics and tendencies of the lithographs published with the journal? These are the questions treated in the following pages. The text parts of the journal and the various strategies adopted by Philipon, manager of the journal, will be examined in the next number.

はじめに

「人間と市民の諸権利の宣言」(1789年)が謳う言論活動の自由と、公共の秩序の名における規制とがしばしば激しくぶつかり合ってきたフランス近・現代の歴史を通じて、七月王政期(1830~1848)は、きわめて際だったケースと言えよう。一方で、七月王政成立の直接のきっかけが、議会、言論界を封じ込めようとしたブルボン復古王朝に対するいくつかの新聞の団結、抵抗だったこと、他方、その結果生まれた政権が、より自由で民主的なものだったとは言え、あくまで、「王朝」であることに変わりなかったこと、そこに既に、新政権から矛盾が吹き出すのにそう時間がかからなかった原因があったのかも知れない。

1830年7月以降、多くの新聞が生まれ、販売数を伸ばし、やがて、方向転換を強いられたり、消えていった。そんな中で、一つの小さな新聞が、数多の差押え、裁判、有罪判決にも拘わらず、ひたすら風刺を武器に5年近くを生き延びたというのは、奇跡と言うべきかも知れない。以下で我々は、「石版画折込付き・週刊風刺新聞=カリカチュール」を読み、眺めながら、その生きざまを具体的に検討してみたいと思う¹⁾。

I. 刊行時期、体裁、刊行責任者など

LA CARICATURE(ラ・カリカチュール=風刺画、風刺文、戯画、漫画)という標題が示す通りのこの風刺新聞は、1830年10月1日に出された創刊予告号を別にすれば、同年11月4日から1835年8月27日の第251号まで、5年近くにわたって毎週木曜日ごとに発行

された²⁾。大判の紙を二つ折りにして4ページとし、各ページ(タテ:約35cm×ヨコ:約26cm)は、表題、末尾の部分を除いて左右2列に分かれる。この判型は、政治問題を扱うことを正式に認められていた「大新聞」のそれより小さかったらしく、後に、保証金を支払わない口実として、カリカチュール紙自身によって取り上げられることになる³⁾。4ページとも、巻頭の飾り絵と、記事の区切れの間に置かれることのある小さな飾り絵を除いて、文字で埋められるが、それとは別に毎号、二種類の、もしくは、大型の場合は一つの石版画が挟み込まれていて、カリカチュール紙最大の特色とも、セールスポイントともなっていた。この石版画には時として、鮮やかな彩色が施された。

発刊に際しては、既に、王政復古期の風刺新聞「シリエット」に、経営者、執筆者として参加していたリヨン出身のシャルル・フィリポン(Charles Philipon)が統括責任者(gérant)となるが、実際には、毎号巻頭日付けのすぐ下に、「すべての請求、送金は、パサージュ・ヴェロ=ドグにあるオーベル風刺画出版社宛に向けられたい」とあることから、彼の義理の兄オーベル(Aubert)との共同事業と考えるべきだろう。ただ正式には、オーベル自身の主たる役割は、あくまで、パリの中でもひとときシックな界限の、それも当時流行のパサージュに構えた店で、風刺画とは限らないさまざまな種類の石版画を出版、展示、販売することだった。この明確な役割分担は、カリカチュール紙に挟み込まれた版画が、同紙の予約購読者にのみ配布され、一般の市場はもとより、オーベル社ですら買い求められないという形式を取ることで、新聞の予約購読者数の増加に有利に作用したように、後に、カリカチュール紙にもしばしば当局の追求が及ぶように

なった時、罰金、投獄の罪を背負い込むのは専らフィリポンで、オーペール社には累が及ばないための法的根拠として役立つことになる。

編集長としてはオディベール (Audibert) の名前が始めのうち見られるが、43号以降は、時折りデルヴィル (Derville) の名前が見られ、更に80号以降は、一貫してデルヴィルとなる。デルヴィルとは、カリカチュール紙以外でも、フィガロ、シャリヴァリなどに関係し、後には「世紀」(Le Siècle) 紙の文学部門編集長となる Louis Desnoyers のペンネームである。

これはまだオディベールが編集長の頃だが、フィリポンは、自分と一緒に告訴された編集長について、編集長のカリカチュール紙との関係は、「純粋に文学的」なものでしかないから、オディベールが告訴される筋合いはないと反論している。オーペールの場合同様、戦略上の必要もあろうが、フィリポンはあくまで、カリカチュール紙の最終的責任は自分一人にあると考えていたようである。

カリカチュール紙発刊に際してもう一つ指摘しておかなければならないのは、創刊予告号から8号頃まで見られた、オノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac) の積極的参加である。と言うより、文章の部分に関する限りは、予告号のほとんど全部と、年末近くまでの記事の半分以上が、バルザックの筆になることが、今日ではわかっている。しかし、創刊に際してどの程度までバルザックの意志が働いたのか、なぜ早い時期で執筆を止めたのかといった、さまざまな問題については、後半部で、文章面からカリカチュールの各時期を考察する際に考えたいと思う。

II. だれが読んだか、眺めたか

カリカチュール紙の読者はどのような層に、またどのくらい居たのだろうか。これについては新聞の歴史などを扱った文献にも、これまでのところほとんど述べられていないが、ある程度カリカチュール紙自体の記事から推測することができよう。

「カリカチュール 18号」(1831年3月3日)中のある記事は、『2種の石版画を850部ずつ彩色する際に払う細心の注意』のため、グランヴィルの石版画の発表が一週間遅れることを詫言っているが、カリカチュール紙に挟まれた石版画は、既に述べた通り、予約購読者以外には配布されないことになっていたはずだから、この時点での予約購読者数は、850人ということになる。

第二の指標は31号(31年6月2日)に見られる同様の彩色作業による遅れの言い訳だが、そこでは、「数多くの歴史的人物が動き回る2枚の絵それぞれの校正1,000部ずつ」と記され、さらに、74号(32年3月29日)では、短期間での「2,000部彩色」が不可能である

ことが云々され、10ヶ月ほどの間に予約購読者数が2倍になったことが示される。

むろん、いずれもカリカチュール紙自身の言う数字だから、宣伝のためにもある程度水増しされているかも知れない。そうでないとしても、現在の新聞発行部数と比べればほとんど問題にならないほどの少なさかも知れない。それでもなおかつ、当時の新聞の発行部数が、少数の大新聞を除けばいずれも一万部に満たなかったこと⁴⁾、また、当時の新聞の読まれ方が現在とはかなり違っていたことを考慮するならば、予約購読者数はさておき、カリカチュール紙の愛読者の数は、決して少ない方ではなかったと言うことができよう。町中の有料図書館 (cabinet de lecture)、カフェ、公園での回し読みなどによって、一般に新聞の読者の数は、予約購読者の数をはるかに上回っていたのである。

カリカチュール紙の予約購読料は、3ヶ月で13フラン、6ヶ月で26フラン、1年で52フランだった。これを単純に他の新聞と比べて高いと考えるか、それとも、予告号の宣伝にしがたって、『貴重な喜びの代価として順当』と考えるかは別としても、そう誰でも生活費の中に組み込める額でなかったことは確かだろう⁵⁾。それにこの新聞の性格からしても、読者はおそらくカリカチュール紙以外の新聞にも、目を通してはいたはずである。風刺の対象を知らないで、風刺を理解したり、楽しむことは不可能だからである。この意味で、52号(1831年10月27日)冒頭の執筆者が、『カリカチュール紙は政治紙ではない、したがって保証金支払いは不要だ』と主張するため、カリカチュール紙購読の一つのきっかけとして、『二つか三つの政治新聞を購読している。ふと、気晴らしが欲しくなってカリカチュール紙を』というケースを挙げているのも、むしろ穏当な主張だろう。極端を言えば、カリカチュール紙が日頃揶揄する政府よりの新聞(「モニター」,「ジュルナル・デ・デバ」,「コンスティテュシオネル」等)を同時に読んでいてこそ、カリカチュール紙の面白味がわかったのではあるまいか。

ここから次のことが言える。つまり、カリカチュール紙の予約購読者には、少なくとも既に一種類の新聞を読みながら、その上さらに、年52フランの支出を苦にしないだけの金銭的余裕を持った人々が多かったのではないかということだ。

こうした金銭的余裕が、当時のフランス社会でどんな階層に相応したのか、にわかに断じ難いところであるが、カリカチュール紙の文章や石版画を見る限りでは、読者層として、文化的教養といったものをかなり具えている人々を、主たるターゲットにしていたように思われる⁶⁾。

古代ギリシャ・ローマの、また新・旧約聖書の記事を歴が、当時は現在よりずっと日常生活に生きていた

かも知れないが、その上に立ったほめかし、笑い、時としては怒りを理解するためには、一定の「文化的教養」が必要だったはずである。また 29 号 (1831 年 5 月 19 日) から 75 号 (1832 年 4 月 5 日) まで、1 年近くにわたってほとんど毎号掲載されていた風刺詩人バルテルミー (Barthélemy) による伝統的十二音節定型詩「ネメジス」の生真面目な調子、政治家達を笑う手段として、彼らがしばしば犯すリエゾンの誤りなどが、好んでとり上げられたことなども、ふだんから文字と親しんでいた層を想定させるのである。

カリカチュール紙の読者層を考える上で参考になる一つのリストがある。罰金支払い支援のための応募者リストである。後に触れるように、カリカチュール紙は、その 35 号の 2 枚の石版画の故に、「国王侮辱の罪」に問われ、1831 年 11 月 14 日の陪審裁判で、統括責任者フィリポンは、罰金 2,000 フラン、投獄 6 ヶ月の刑に服することになる。カリカチュール紙にとっての最初の有罪判決である。

これに対して行動的なフィリポンは、11 月 24 日発行の 56 号で早くも、「罰金支払い支援金」を募集し、応募者のリストを毎号掲げること約束する。募金は翌年 4 月まで続き、総額で 2,300 フランほど集まったから、フィリポンのアイデアは成功したと言うべきだろう。我々が今注目したいのは、この間ほぼ毎号掲載されたリストに見られる、募金者の身分、職業である。

どの様な人々が募金に応じていたのだろうか。応募者延べ総数約 230 人 (グループによる場合は、1 グループ 3 人としたから、実際にはもっと多いだろう) 中、身分職業を多少とも明かしているのは 85 人、この内もっとも多いのは、爵位などによって貴族、もしくはブルジョワジーに属すると推定されるもの (20 人)、次いで、有名無名の石版画家 (19 人)、さらに、医師、弁護士、代議士、役人 (12 人) と続いている。

こんな場合、必ずしも応募者が真実を明かす必要はなく一単に個人名をあげたケース (74 人) の他、匿名希望も 18 人いる一、また、「笑う自由支持者」(56 号)、「かの三日の戦士」(57 号)、「貴紙の政治的意見すべてに与するものではないある購読者」(63 号) といった、この新聞にむしろふさわしい名乗り方もあるところを見れば、すべてを真に受けるわけにはいくまいが、それでもなお上の数字は、カリカチュール紙の読者についてある程度の示唆を与えているとみることができよう。

最後に、オーベール社の店頭風景自体を描いた石版画を見ておこう。カリカチュール紙 60 号 (1831 年 12 月 22 日) にトラヴィエス (Traviès) の描いた作品である。

絵の上部には、「オーベール出版社」(AUBERT EDITEUR) と社名があり、4 本の円柱で正面部分が三

つに分けられている。真中はおそらく店の入口なのだろう、なにも展示されていないが、左右それぞれには 6, 7 枚の石版画が吊され、大勢の見物人で雑踏している。吊されている絵の大きさからすると、全体で 3 メートルほどの幅だが、そこに 22, 3 人の人間が押しかけている。うち 3 人は、身のこなし、くたびれた服装 (12 月下旬だが外套は着ていない) からして、民衆の出 (hommes du peuple)、残りは、帽子、コート、靴などからして、ブルジョワジーに属すると思われる。しゃれた身なりの女性の横からは、犬の後足がのぞいている。国民軍兵士の被る、巨大な毛皮帽もまじっている。彼らはほとんどみんな、こちらに背中を見せているが、どうやらその視線はある方角に向けられているらしい。そしてこちらからみて最前列の中央で、民衆出の男の一人だけがこちらを向いて、左手でみんなの視線を集めている方角を指しながら《Faut avouer que l' gouvernement a une bien drôle de tête.》(いやそれにしても、お上っていうのは、みょうちきりんな顔をしてるもんだな) と言っている。『みょうちきりんな顔』とは、彼が指す方に三つほど見える、「洋梨型の顔」のことだが、これについてはもっと後で触れることにして (V. 3)、とりあえず次の点を指摘しておこう。

まずこれは、店頭に黒山のような見物人を描くことによる、オーベール社の、またカリカチュール紙の、自己宣伝であり、同時に、この時期—1831 年末〜32 年初め—一次第に激しさを増しつつあった政府側からの言論規制に対する、挑戦、当てつけである。また、カリカチュール紙の他の石版画でも、好んで、民衆 (peuple) と呼ばれる階層をとりあげたトラヴィエスは、ここでも、見物に訪れた人々の社会階層をはっきり描き分けているが、ここではさらに、民衆出の男を画面の中心に据え、こちらを向かせることによって、絵を見にやってきた「紳士淑女達」をも、絵に描かれている風刺の対象の世界の中に組み入れてしまっていると考えこともできよう。男の表情の豊かさ、屈託のない手振りが、我々から見て画面の左端で、今しも見物を終えたのだろう、整った服装にステッキまでついて、とりすまして帰っていく紳士の姿と対照的である。

最後に、先ほど我々が、「罰金支払い支援者リスト」から想像したカリカチュール紙購読者達の属する社会層の分布と、トラヴィエスが描いた情景がほぼ一致することもつけ加えておこう。医師、弁護士達にまじって、リストの中で、「オーベール社展示場の予約購読者なる鍵職人」(58 号) とか、「プロレタリアート」(61 号) と名乗って寄金に応じた人達もこの絵の中にいるのかも知れない。

III. 口絵, サブタイトル

カリカチュール紙のどれか一つを取り出して、そのタイトル部分を眺めてみよう。

(1) 口絵: 風刺新聞、もしくは、いわゆる「意見紙」が、その巻頭に旗印のようにして、なんらかの飾り絵や銘句を載せるのは珍しいことではない。例えば、正統王朝主義を標榜した新聞「ラ・コティディエヌ」の百合の紋章、初期の「フィガロ」紙に見られた、ポーマルシェの作品から引いたいくつかの場面、台詞がそれだ。

カリカチュール紙の巻頭には、立場の一貫性を誇示するかのように、創刊号から最終号に至るまで、いつも同じ図柄の飾り絵が載っている。弓、矢立ての矢、刀、ペンでものものしく武装した一人の道化師が、今まさに左手に鞭を振り上げ、なにものかを叩きのめそうとしている。爪先の思い切り反り上がった靴を履いた彼の右足は、新聞雑誌検閲の象徴である大きな錠を踏みつけ、後ろに同時代への風刺の象徴であるヤマアラシを、忠実な犬のように従えている。道化の、こちらから見て右後ろには通路の入口があり、その上の標識、「パサージュ・ヴェロドダ」が、彼がオーベル風刺画出版社の住人であることを示している。また絵の下には、「(喜劇は) 笑いながら風俗を正す」(Castigat ridendo mores) というラテン語詩人サントーユ(Santeul)の言葉が、坐右の銘でもあるかのように置かれている。「笑いながら」とは言うものの、道化は怒りの表情を浮かべているのだが。

(2) 表題とサブタイトル: 口絵と銘句の下には、飾り模様のついた、立体感を与える活字で、LA CARICATUREとある。「カリカチュール」という言葉は、むしろ派生的な用法を持っていたが、今以上に、原義としての美術用語の臭いを強く持っていたらしい。もともとこれは、17世紀のイタリアでの用法が、同時代のフランスにそのまま入ったもので、セゴレーヌ・ル・メンによれば、「狙いをつけた人物の特徴を歪めることで、その人物のまとまりを壊した、小型の戯画肖像画、つまり戯画化された肖像画」を意味したらしい⁷⁾。我々の「カリカチュール紙」でも、タイトル、本文中、いずれの場合も、こうした絵画での意味を強く連想させながらの派生的用法が多いと言えよう。

ところでこの表題には、「どんな分野でのカリカチュールか」を表す複数の形容詞が、時期によって微妙に変わりながらついている。創刊号から22号(1831年3月31日)迄は、LA CARICATURE/politique, morale, religieuse, littéraire et scénique(政治、風俗、宗教、文学、演劇分野での戯画)となっているが、23号からはpolitique(政治)の文字が落ち、100号(1832年10月4日)になると再び、politiqueが復活

し、その代わりreligieuse(宗教)が落ちて、LA CARICATURE/politique, morale, littéraire et scéniqueとなつて、最終号まで続くのである⁸⁾。

一見些細な問題のようにも映るが、特に「政治」の文字のあるなしは、一時期のカリカチュール紙にとって、死活問題ですらあったのだ。と言うのも、王政復古期を通じて、政治問題を扱う全ての新聞雑誌に義務づけられていた保証金支払いの制度が、1830年12月に復活したため、フィリポンは、3万フランという高額の資金の準備を絶えず検察当局から要求されたのである。どんな応酬があつて23号以降、「政治」の文字が落ちたのかは不明だが、それからしばらくの間(24号、26号)フィリポンが、『実質的には政治紙ではないか』と迫る検事総長ペルシル(Persil)、警視總監デモルティエ(Desmottiers)に宛てた手紙という形式で、さまざまな論拠を出しながら、自分の新聞は「政治紙」ではないと言い張る姿がみられる。

その後99号まではこの形で続くのだが、ただ、カリカチュール紙を仔細に追ってみると、1832年6月7、8日、パリ全市に戒厳令が布かれた際、最高裁判所(cour royale)によって、カリカチュール紙も「政治問題を扱っている新聞」と裁定され、保証金24,000フランを支払った上で、ようやく続刊を許されたという記事にぶつかるのである(86号、90号)。戒厳令後最初の86号から99号までは、「政治」という文字のないまま、「政治紙」の扱いを受けていたのだろうか。こうした問題は、我々が今典拠としているマイクロ・フィッシュ版も、また、町田市立国際版画美術館所蔵の装丁版も、初版ではないため、創刊号から99号までは一貫して、《Morale, Religieuse, Littéraire et scénique》であり、創刊予告号、グランヴィル(Grandville)による予告ポスターでは、それぞれ、《Morale, Politique et Littéraire》、《Politique, Morale et Littéraire》と微妙に順序が異なる点も含めて、さらに検討すべきだろう。

IV. カリカチュール紙の石版画

カリカチュール紙は、創刊号から終刊号に近い230号(1835年4月2日)まで、最後のページを必ず「予約購読条件」で締めくくっている。購読料金提示の前におかれた、最初の部分を読んでみよう。

『カリカチュール紙は、高名な美術家達⁹⁾による石版画を、年104枚提供する。各号とも、大判紙一枚の文章と、2種類の石版画からなり、正確に木曜日毎に発行される。

経営部が本紙の石版画を市場に賣りに出すことはない。石版画業者が入手を希望する場合には、新聞の予約購読が必要である。

注意: 受領品にしわが寄っていた場合、紙こて

(presse à papier) でしわを伸ばすことができる。その際には、予め紙を湿らせておかねばならない。…」

条件を示す記事自体は 231 号からは消えるが、読者との約束は最終号まで守られ、毎号 2 種類の石版画が一例外的に 3 種類のこともある。またグランヴィルなどが好んだ大型の絵の場合には、1 枚で 2 枚に数えられた一必ず添付された。さらに平均して 3 回に 1 回は彩色を心がけたり、「扉つき版画」(dessins à porte)、つまり、重ね合わせた画面の上の方をずらすと、その向こうに別の画面(部屋の内部など)が現れるといった工夫が施されたりした。上記引用文中の『しわ伸ばし』の記述も、貴重な石版画を大切に扱う読者の姿を想像させるものである。

18 世紀末、ドイツで考案された石版印刷術は、1820 年代にはフランスでも、いち早く、ナポレオン時代を回想する戦争画、ロマン派的な風景画、反動的な政府に対する風刺画とさまざまな作品を生み出し、1860 年代になって写真術にとって代わられるまで、イメージの複製手段としての王座に君臨する。文字ではなくイメージが、大量に、かつ短時間で複製できるということが、ジャーナリズムにとってどれほど貴重であったか、また、風刺の手段としてどれほど強力な武器となり得たかは、おそらく今日では想像できないものがある。フィリボン、オーベールの共同事業である「オーベール風刺画・石版画出版社」も、カリカチュール紙自体も、当時、画家、美術愛好者、双方の側に見られた、石版表現に対する一種熱っぽいまでの憧れの雰囲気抜きでは考えられないのである。

創刊予告号も、なによりもまず石版画の力、重要性を強調し、その上で、版画発行の規則正しさを、また、オーベール社という版画発行会社との密接なつながりによって保証される絵自体の質の高さ、印刷技術の優秀さを約束する。

予告号の文章の一部を読んでみよう。

「年 46 フランで¹⁰⁾ 104 枚の石版画、これはもう贅沢の極みと言えないだろうか。しかるべき人々の家に、石版画のふんだんに載っているアルバムが持ち込まれ、その人々の退屈が紛らわされる。生真面目な唇の上にも笑いが浮かび、陽気な数時間が過ぎる。こうした一見お金持ちだけに限られた特権を、羨ましく思わなかった人がいようか？」

もちろん、実際にカリカチュール紙が購読者に提供する石版画が、すべてこうした「陽気な数時間」を過ごさせるものとは限らなかった。と言うより、絵の主題、スタイルの変化にともなう、この陽気さ、笑いが質的に変化していったと考えるべきだろう。それについては、後に見ることにする。

V. 石版画を中心としてみたカリカチュール紙の風刺の対象、方法などの変遷

カリカチュール紙が、そのタイトルとそれにつけられた形容詞—我々がサブタイトルと呼んだもの—によれば、「(政治・) 風俗・宗教・文学・演劇、それぞれの分野における戯画」であることは既に見た (III. 2)。ではその「戯画」ではなにか、どの様にとり上げられたのだろうか。

今、カリカチュール紙が刊行された 5 年間を、一応、最初期、初期、中期、後期に分けて、それぞれの時期におけるこの新聞の特徴を、石版画を中心に見ていくことにしよう。

文章部門についてはどうなのか、絵の部分と同じなのか、違うのか、両者はどの様に関連し合っているのか、については、一通り石版画を眺め終わってから検討することにしたい。

1) 最初期 (～1831 年 1, 2 月)

七月革命直後の数か月は、自由・平等の理念を掲げる新しい憲章の遵守が新政府の姿勢でもあったから、カリカチュール紙の風刺も、一方ではシャルル 10 世とその側近、イエズス会といった前政権の中心勢力に、他方では一般市民の生活風俗に向けられることが多かった。

予告号にグランヴィルが寄せた石版画、「第三次王政復古」を眺めてみよう。これは、当時既に(予告号の刊行は 1830 年 10 月 1 日)ブルボン家の一族共タイギリスに亡命を余儀なくされていたシャルル 10 世が、王座奪回のため祖国に戻ってきたという、この時点では考えられなかった事態を想定して描かれたものだ。見る影もなく憔悴した以前の王は、左手には剣と、狩りの獲物だろうか一匹の小兔を一兎は臆病の象徴でもある一、右手には十字架を持ち、手綱をくわえ、馬に跨っている。といっても、それは玩具の木馬でしかない。彼の横には、中世風の槍を勇ましく構えた女性(ペリー公爵夫人だろう)と、王冠を頭に載せた子供が、なにかギロチン台のような玩具を抱えて、行列の先頭を歩いている。おそらくこれは、亡命の際、既に正統王朝の王座を継がせたボルドー公(故ペリー公爵の息子、シャルル 10 世の孫、のちのジャンボール伯)なのだろう。二人の後には、元帥、大司教をはじめ、十人近い男がつき従っている。一同が入ってきた部屋は、どうやら亡命前の彼らの宮殿の一室のようだ。

第 2, 3 号(1830 年 11 月 11, 18 日)にも同じグランヴィルの作品が見られるが、やはりシャルル 10 世治下の人物への風刺に当てられている。いずれも「投影影」(Les ombres portées)というタイトルで、行列をつくる人物の影が壁に映り、その影が彼らそれぞれの本性

を現すという趣向になっている。例えば、第2号の行列の先頭で杯状のものを口に当てながら歩いている修道僧の影は、豚の頭を思わせる酒壺だし、最後の二人は神父だが、その影は、言論規制、衆愚政治を象徴する蠟燭消しに他ならない。

創刊号の石版画の一つを担当したアンリ・モニエは、画面中を占める一人の人物で、前政体の醜さを描いている。ずるそうな眼光を浮かべた男は、その服装、腰の剣からして貴族院議員でもあろうか。服のボタンもかからないほどに肥満したその腹は、彼が地位を利用してうまい汁を吸い続けた特権者—絵のタイトルは皮肉に、「前体制の犠牲者」(Une victime de l'ancien système) —であることを示している。

ところで、こうした前政体の権力者に対する風刺と並んでこの時期のカリカチュール紙に多いのは、風俗描写的な石版画である。たとえば、第10号(1831年1月6日)のムニュ(Menut)の絵、「パリの夫婦」では、シルクハットに燕尾服、ステッキを持ち口髭をはやした紳士が、これまた着飾った女性と腕を組んで扉を閉め、どうやらこれからお揃いで外出らしい。ただ扉の横には「第5階」とあり、扉も、床も立派なつくりとは言えない。はたせるかな、画面が横にずれるようになっていて、動かすとその下にもう一枚別の絵が現れ、今まで隠されていた扉の向こう側を見せるということになる。2畳ほどの屋根裏部屋、洗濯ものを紐に吊したその下の椅子で、幼児がひとりで頬杖をついている。この絵は、「扉の内と外」という当時流行していたらしいアイデアを使って、一見立派な生活も実はどんなに貧しいものであるかを示しているわけだ¹¹⁾。

外観と内実の大きな落差が示される「パリの夫婦」は、「投射影」同様、一種の暴露による風俗批判だが、批判であると同時に、読者と一緒に楽しく笑おうという目的、もしくは、読者にある種の知識を与えようという目的を併せ持つ石版画も、この時期には少なくない。「ものづくし」とでも呼べる一連の作品がそれである。例えば、11号(1831年1月13日)の石版画の一つは、「髪型、帽子、ステッキ、扇」というタイトルで、当時はやりのロマン派詩人を気取る男、イエズス会士、深刻な思想家、田舎者、商人といった男の12のタイプが、また、夫と居る時、愛人と居る時、といった女性の4種の状況が、それぞれ特徴的な髪型、帽子で、また、ステッキ、扇の活用の仕方でも示されている。15号(1831年2月10日)で同じ画家アダム(Adam)がとり上げるのも、今度は、「パイプ、雨傘、煙草入れ、ハンカチーフ」という項目の違いだけである。

この時期のカリカチュール紙に、時折り登場する画家に、アシル・ドヴェリア(Achille Devéria)がいる(5, 9, 12, 18号)。いずれも、上・中流の優美な婦人達を穏やかなタッチで描いたものだが、とりわけ、同じ号

に挟まれたもう1枚の絵と比べると、そのスタイルの特徴がはっきりする。中でも9号(1830年12月30日)の場合が、典型的だ。「この地上で最も美しいもの」(Ce qu'il y a de plus beau sur la terre)と題されたドヴェリアの絵では、3人の、若くて上品な女性が、一つのソファの上で、ほぼ正三角形を形作るように、互いに寄り添っている。彼女達のふっくらしたスカート、豊かな髪、顔の角度、表情、すべてが、平和な優雅さを湛えている。ドヴェリアが得意とし、彼の人気を高めた風俗画の一つだ。こんな絵を期待して、カリカチュール紙の購読者になった人達もいたかも知れない。ところがこの絵が、「世界でもっとも醜悪なもの」(Ce qu'il y a de plus affreux dans l'univers)と題されたトラヴィエスの絵と組み合わせられているのだ。背負い籠を背負った屑屋が真中に立ち、右からは、地面に膝をついた女性が足許にしがみつき、左では、別の女性が彼女を押し戻そうとしている。獲物の取り合いでもしているのだろうか。全体が作る構図は、ドヴェリアの場合と同じ、ほぼ正三角形だが、服装、年齢、表情など、すべてが対照的なことは言うまでもない。

こうした組合せに画家達自身参与していたのか、それとも、もっぱら、1枚1枚にはなかった風刺的效果を狙ってのフィリボンのアイデアかは、想像の域をでない。ただ一つ言えるのは、こうした雰囲気になじめなかったドヴェリアが、やがて、カリカチュール紙から去ったとしても、不思議はないということである。

後から振り返ってカリカチュール紙全体を見るならば、ドヴェリアのようなスタイルはもとより、革命以前の王朝への批判、また、比較的穏やかな調子の風俗風刺、ないし描写は、例外的なものであり、その後は、同じ傾向の文章と共に、ほぼ完全に姿を消してしまうことになる。我々がこの時期を、最初期と名付けたのもそのためである。ただし、この時点でのカリカチュール紙は、そのままの方針で進もうと考えていたのではあるまいか。少なくともカリカチュール紙自身の言うところでは、「はじめの3ヶ月、糾弾の対象は専ら個人生活の滑稽、風俗であり、それだけで充分安定した収入を得ていた」¹²⁾のである。

2) 初期(1831年1, 2月～同じ年の末頃)

1830年8月はじめ、新しい憲章に忠誠を誓って、「フランス人の王ルイ・フィリップ一世」として即位したオルレアン公は、はじめ、七月革命の理念となった言論の自由はもとより、王政復古期に見られた反動的政策からの徹底した解放の方向へ乗り出そうとするが、同じ年の末頃からは、前政権最後の大臣達に対して下された、無期禁固という「寛大な」措置や、新聞発行に際しての保証金、印紙制度の復活などによって、次第に厳格な「秩序」の再建へと突き進むことになる。こ

うした状況が、約束の放棄、卑劣な裏切りとして、フィリボン達の目に映ったのは言うまでもない。

「現体制」の新しい傾向に対して、カリカチュール紙がその鞭を直接、はっきりとふり向けたのは、石版画に関する限り、11号(1831年1月13日)、13号(1月27日)あたりと考えていいだろう。11号には、既に見た風俗風刺的な「ものづくり」とは別に、大道芝居の呼び込み風景に託した、政府、もしくは王家風刺が見られ、13号では、言論統制の復活がとり上げられているからである。

はじめに11号を見よう。芝居小屋の前にしつらえられた呼び込み台の上で賑やかに鐘を鳴らしているのは、国王と親しい弁護士出身の下院議員アンドレ・デュパン(のちに下院議長をつとめる)。また、七月王政下でも大きな勢力を持つタレーランらしい人物が、やっとこで抜いた歯を誇らしげに周囲の公衆に見せている。同じ台上には、それぞれお手玉をしたり、太鼓を叩いたりしている芸人達がいるが、小屋にかかった幕には、「皇室費 18,000,000」という文字が見える。そして絵の下には、説明文として、「さあさあみんな、入った、入った。ポケットに1,800万ほどのはした金があるのなら、〈最良の共和国〉を見に小屋に入らないという手はないぜ。なにせ、よそではお目にかかれぬ、とびきり珍しい代物だから。」という文句が書かれている。これを叫んでいるのは、台上、左端で三角帽を被っている男だろう。

前年7月29日、パリ市庁舎のバルコニーで、群衆を前に、自由の英雄ラファイエット将軍から、「これこそ最良の共和国となろう」という祝辞を受けながら抱擁し合ったオルレアン公は、以前の絶対君主とは違う「市民王」として即位したのだが、やがて同じ年の12月には、王家に与えるべき皇室費をめぐる激しい議論が議会で戦わされる。1,800万フランとは、時の首相ラフィットが提案し、高額過ぎるとして議会在猛反対していた数字である。この時以後も皇室費の額は始終問題となり、男子5人、女子3人という子宝に恵まれた王の家族構成も、税の負担がかかりすぎること、国民の不平の種になることもあったらしい。ラフェによるこの彩色石版画は、カリカチュール紙側から王に王家に、また時の内閣に対して放たれた攻撃の第一弾と言えよう。

今度は、13号に載った石版画を眺めよう。もっともそのうち一枚は、「時代別男子服装」という「ものづくり」で、11号の場合と同様、ここでも最初期と我々が呼んだ時期の傾向がまだ強く残っているわけだが、もう一枚は、政治犯裁判所(cour prévôtale)の下した判決に従って、公衆の面前で、今まさに烙印の刑を執行されようとしている「自由女神」という絵柄である。国会議事堂の屋根らしきものを背景にした晒し台では、

「自由、共和主義」の象徴であるフリギア帽を被った女性が、後ろ手に縛られ、柱の前に立たされている。頭上の罪状高札には、「政治犯裁判所は、1790年パリ誕生のフランソワーズ・リベルテを、1830年7月27、28、29日に犯した反逆罪のかどにより、保証金支払い、及びT.R.なる文字(Timbre royal 国王印紙の略)の烙印の刑に処する」とある。その横では、ひとりの男が腹這いになって、炭火に盛んに息を吹きかけ、別の凶暴な顔をした男(アンドレ・デュパン?)が、その中に焼きごてを突っ込んでいる。晒し台の周りでは、二人の騎馬警官が刑の執行を監視している横で、数人の男達が、憤り、また、嘆き悲しんでいる。さらに同じ号の巻頭には、ドゥカンのこの絵を補強する形で、処刑に至った裁判の模様を伝える、フィリボンの署名入りの長い文が置かれている。これ以後、カリカチュール紙ではおなじみとなる、「自由女神受難」の図の登場は、七月革命によって達成される筈だった理想が、早くも大きく揺らいでいることを示していると言えよう。

もっとも、11号、13号に見られた、「現体制」に対する批判が、それ以前の号に皆無だったわけでないのは、最初期のドヴェリアとトラヴィエスそれぞれの絵が組み合わせられた9号について既に見たところだが、他に二つだけ例を挙げておこう。

6号(1830年12月9日)に挟まれた2枚の版画は、9号の場合と同様、「民衆の夜会」(ピガル)、「上流社会の夜会」(ラミ)の2枚が対をなすように仕組まれていて、一向解決されないどころか、革命後の混乱によって益々ひどくなりつつあった貧富の格差を浮き彫りにしている。また、8号(1830年12月23日)の石版画のうち一つは、「七月二十九日の大司教館」と題され、前体制下での宗教界の墮落を揶揄しているが、もう一枚の「大サーカス団」(Grands Sauteurs)と題されたドゥカンの作品の方は、大きな太鼓を叩くデュパンに踊らされる曲芸師達(上院・下院の議員達?)を通して、ちょうどその頃上院で行われていた元大臣達の裁判を風刺していると考えられるのである。

国王自身、もしくは王家(11号)、言論統制(13号)、貧富の格差(6号)、政府の方針に盲目的に追従する議員達と彼らを操る政府(8号)……こうして並べてみると、カリカチュール紙が、絵によっても文章によっても今後繰り返し取り上げることになるテーマが、早くもこの時点で、出揃っていると言うこともできよう。

今度は、この時期にも数々の傑作を提供したグランヴィルの傑作の一つを見ておこう。「自由女神(フランソワーズ・リベルテ)の烙印処刑」の載った13号から20日ほど経った16号(1831年2月17日)、また19号(同年3月10日)に続き物として現れた「1831年のカーニバル ①/②」がそれで、両者共に色付き、ワイド版である。これについてもまた、巻頭に説明文が一①

についてはバルザックの文とされる一載っているの
で、それを参考にしながら、まず第①部を覗いてみる
ことにする。

19世紀前半のフランスではいぜんとしてカーニバ
ルの祭りが人々の生活に根を下ろし、毎年その時期に
は仮装、仮面が町中に幅をきかせたようだから、カリ
カチュール紙の石版画家達が、しばしばそこから趣向
を借りてきても不思議はない。

グランヴィルは、我々が予告号、2,3号についてす
でに見た通り、大勢の人物を並べて立たせたり、行列さ
せたりする構図を好んでとるが、ここでも全部で24人
の人物が描かれ、そのほとんどが仮装しているか、も
しくはこれから仮装するための衣裳を借りようとして
いる。例をいくつかあげよう。画面、我々から見て右
端に近い方に、特徴的な頬髭からすぐそれとわかる王
ルイ・フィリップが立っているが、彼は壁に掛かって
いる仮装用の服を、いかにももの欲しげにじっと眺め
ている。バルザックによれば、この男は「(貸し衣裳屋
の) 釘に吊る下がって借り手を待っているシャルル10
世の服を眺める、フランス市民の中でももっとも偉大
な市民」その人で、自分が国外に追放したはずの専制
君主の服を羨み、それを身につけたがっているという
ことになる。

また、「セバスティアヌ様ご予約ポーランド軍、軍
服」という札の下に下がっている服の風刺性について、
バルザックは、「我が内閣が借り出したこのポーランド
服以上に、わがフランス国の外交の汚辱を、芸術的に
断罪した新聞記者が未だかつてあっただろうか」と絶
賛する。当時、ロシアの専制政治からの独立を勝ち取
ろうと戦っていたポーランド議会の支援要請を、フラン
ス政府は冷たく拒んでいたのである。

その他にも、自由主義思想の持ち主バンジャマン・
コンスタンの入会を拒み、かわりに保守的な詩人ヴィ
エネを迎え入れたアカデミー・フランセーズにはミイ
ラの姿が与えられ、例の通りフリギア帽を被った自由
女神は、今にも崩折れそうな、重病人として描かれて
いる。

3週間後、19号の第②部では、多額の皇室費をせび
りとられる貧しい「フランス」、停滞した商業活動、異
常に膨らんだ国家予算、偽善的新興宗教としてのサン・
シモン主義などが、愉快的な、またグロテスクな姿
態で我々を笑わせるのである。

最後に、初期カリカチュール紙の石版画の中でもつ
とも大きな反響を及ぼしたもの一同時にそれは、カリ
カチュール紙にとって次の時期への橋渡しのような役
を果たしたのだからについて触れておこう。35号
(1831年6月30日)に挟み込まれた2種の石版画、と
りわけ左官職人 (maçon) の姿をしてにこやかに笑っ
ている、ルイ・フィリップの正面からの肖像がそれで

ある。

1831年3月、カジミール・ペリエを中心とする内閣
が成立する頃から、政府は、七月革命に際して指導的
な役割を果たした共和主義的理念との力による対決を
はかり始め、それとともに言論活動への締め付けは、急
速にその厳しさをますますことになる。オーペール出版
社の石版画「シャボン玉」(Les bulles de savon) が、国
王侮辱罪の疑いで、発売と同時に差し押さえられたの
も、3月初めのことだった。

ルイ・フィリップらしい面長の男が、机に座って左
脇をつき、頬を抱えた気楽な恰好で、シャボン玉を吹
いている。机の上には、「七月の泡」が溢ればかりに
盛り上がったカップが置かれ、既にいくつものシャボ
ン玉が宙に浮いている。玉にはいちいち、「言論の自
由」、「政府の経費節減」、「憲章遵守」、「世襲貴族院制
廃止」、「民主選挙」といった革命時のスローガンが記
されている。作者フィリポンが、七月政府の約束不履
行を、雲散霧消するシャボン玉になぞらえているのは
明らかである。

当局側の手続き上の不備のため、いったん差押えが
解かれ、再度差し押さえられるといった事情について
はここでは触れないが、5月23日、陪審裁判所の法廷
に立つまで、既に述べた通り、フィリポンが統括する
カリカチュール紙は、実質的「政治新聞」として保証
金の支払いを執拗に迫られることになる。

こうした追及をかわしたフィリポンは、上記の法廷
でも陪審員達の無罪評決を勝ち取るが、その直後に刊
行された30号(5月26日)の付録に記された弁護士ブ
ランの雄弁、自ら検察の役を演じてみせたフィリポン
のユーモアと皮肉を見る限りでは、この頃は、オーペ
ール社、フィリポン、また、カリカチュール紙にとつ
ても、一つの絶頂期を迎えていたと考えられるのである。
35号の石版画が出たのも、その頃のことである。

2枚のうち1枚は、ルイ・フィリップ、シャルル10
世、「自由女神」、それぞれを模した操り人形と、人形
師のタレーラン、見物人、それに三色旗を翻している
テュイルリー宮殿という図柄だが、とりわけ司法の追
及を受けたのは、誰が見てもルイ・フィリップの似姿
とわかる左官職人がまん中に立つもう一枚の絵だった
ようだ。にこやかな笑みを浮かべる彼は、右手に持っ
たこてで、足もとに置かれたモルタルをすくい、「7月
29日通り」の建物の壁に残されている落書きを塗り潰
そうとしている。作業は半分ほど片付いたところだが、
まだ壁には消しかけの文字がいくつか見える。「死んで
も自由を」、「ラファイエット 市庁舎政綱」、「自由は
世界を駆け巡るであろう」といった七月革命の際には、
みんなが熱っぽく唱えた言葉だ。左官職人の右前腕に
は、ジェマップ、ヴァルミーという字が読みとれるが、
これはフランス大革命の際、革命軍が強力な外国軍隊

に対して勝利を収めた二つの戦場で、当時の革命的愛国青年オルレアン公、つまり現在のルイ・フィリップも、「革命軍の戦士として参加した」ことを常々誇っていたことをからかうもの。足もとのモルタルの桶には、「デュピナード」とあって、既に我々も見た王の助言者アンドレ・デュパンの弁舌の巧みさによる共和派への弾圧が暗示されている。「デュピナード」はまた、「デュペすること」、つまり「だまし、ひっかけ」をもここでは意味しているのだろう。

壁に残された七月新政府の理念を、完全に消し去ろうとする左官職人ルイ・フィリップの肖像というアイデアは、「シャボン玉」の場合と同工異曲と言うべきだろう。違ふとすれば、シャボン玉が自然にはじけて消えていくのに対し、ここでは、七月の約束が積極的に塗り潰されようとしていること、前者のブルジョワ風の男に対して、ここでは民衆出の男であること、また、左官職人のこやかな笑いは、前者の表情には見られなかった、ということくらいだろうか。いずれにせよ、この絵は、同じ号に載ったもう一枚の石版画と共に直ちに差し押さえられ、今度も、「国王侮辱の罪」の嫌疑で裁判にかけられることになる。

3月初めに差押えを受けた「シャボン玉」が、最終的に無罪を勝ち取ったのは5月23日、この間2ヶ月以上を必要としたわけだが、今度の場合はそれ以上で、ほとんど半年後の11月14日に判決が下されることになる。そして今回は、同じ弁護人ブランの丁寧な論理付け、またフィリボン自身の心情の吐露にも拘わらず¹³⁾、陪審員の評決は有罪、その結果、罰金2,000フラン、投獄6ヶ月がフィリボンに科されたのである。

「権力の象徴としての王の似姿」を遠慮せずに描き続けたフィリピンの流儀も、今後は許されなくなったわけである。風刺のための貴重な武器の喪失である。この困難をどう解決していくか。それが、罰金支払いの方策、統括責任者の不在とともに、あらたにカリカチュール紙に課せられた問題である。

3) 中期 (1831 年末頃～1832 年末頃)

国王の「似姿」を巡る裁判に敗れた「カリカチュール」は、中心人物を一時的にせよ獄中に奪われると同時に¹⁴⁾、多額の罰金を支払わなくてはならなくなったわけだが、同時にこの裁判から、風刺のための強力な武器を授けられることになる。55号の裁判記録によれば、弁明を許された被告人フィリボンは、「もし私の絵が王に似ているからといって罪になるのであれば、単なる梨 (poire) を描くことも罪になるはず」と言いながら、王のやや下膨れの顔、少しそれを誇張した顔、ぐっと洋梨 (poire は日本で一般的な梨と形が異なるから、以下では洋梨、西洋梨などとする) に近づけた顔、洋梨そのものに目鼻の線をつけたもの、と

いう4種のスケッチを、その場で描いてみせたという。「ルイ・フィリップ=洋梨=ルイ・フィリップ」、つまり、どちらを見ても(考えても)、もう一方を思い浮かべてしまうという図式の始まりである。

この4種のスケッチには、フィリボン自筆の注釈が添えられて、裁判から10日しかたっていない56号に号外の形で挟まれる。当局は直ちにそれを差し押さえるが、フィリボンは、「裁判での証拠品には公開性が保証されているはずだから」と、かまわずオーベール社の店頭に展示、その時の賑わいこそが、我々が既に眺めた(II.) 60号のトラヴィエスの絵というわけだ。いわば、「洋梨・ルイ・フィリップ」誕生のお披露目である。その後のカリカチュール紙上で梨の出現は、文字通り数え切れないから、目立つものをいくつか挙げるに止めよう。

64号(1832年1月19日)では、梨一個が1,400万フランで落札され(競売を行うのは内閣首班のカジミール・ペリエ。数字は皇室費の額)、71号(1832年3月8日)のドーミエによる「1831年の仮面達」(1832年の誤りらしい)では、政治家達の、いずれもかなり歪められた顔の並ぶ中央に、うっすらと目鼻だちのついた梨が一つ置かれている。

また84号(1832年6月7日)では、フランス大革命の際ルイ16世が処刑された革命広場(現在のコンコルド広場)に、ルイ16世に対して犯した罪を償うための記念碑を建てようという趣向の石版画が見られる。説明文には、「革命広場に建造予定の贖罪碑」(但し、expiaoire=罪をあがなうと書くべきところが、expia-poireと綴られている)とあり、人々、馬車が行き交う広場の中央に、大きな一箇の洋梨が、台座の上にひざまずいた恰好で置かれている。そしてこの場合も梨にはうっすらと目、鼻の線が描かれていて、なにか可憐な印象を与えている。

89号(1832年7月19日)には例外的に石版画が3枚折り込まれたが、うち2枚は梨をテーマにしている。天井の高い納屋で、男が二人、子供が一人、滑車に掛けたロープで、巨大な袋を吊り上げている、もしくは落下しないように必死になって支えている。袋には穀物でも詰まっているのだろうか。農家では日常見られる情景かも知れない。ただ作者のドーミエは、袋におなじみの梨型曲線を与えることで、この風俗画を愉快的、しかも痛烈な風刺画に変えてしまったのである¹⁵⁾。

もう一つの方では、背中合わせになった二人の男が、二人して大きな袋を肩に担いでいる。袋の下方が膨らんでいるだけでなく、袋の上にさらに、小さな梨型のものが載っている。今にも荷物は背中からずり落ちそうで、男達は落とすまいと必死である。全体が、頭、胴、脚からなる一個の人体を思わせるが、作者は、いくつかの階層からなる国家をイメージさせようとしたのか

も知れない。絵の下の説明 *Mauvaise charge* は、「いやなお荷物」を意味すると同時に、説明文も言うところ、「下手な風刺画」という言い逃れにもなる。

ルイ・フィリップは本当に洋梨に似た顔をしていたのだろうか。ダゲールの残した銀板写真(1839年)、同時代の画家達によるいくつかの肖像画、またフィリポン自身が描いた例の「シャボン玉」を吹く男、いずれもやや面長の顔というくらいで、取り立てて洋梨型というわけではあるまい。ただ、フィリポンが4種のスケッチを法廷で描くより三ヶ月ほど以前に、グランヴィルが既に、洋梨型に下膨れした顔の王を、画面中央に据えた石版画を描いていることを指摘しておこう(42号, 1831年8月18日)。ひょっとしたら、カリカチュリスト達の鋭い目には、面長の顔の後ろに、だいぶ前から洋梨がはっきり見えていたのかも知れない。

西洋梨独特の、上から下に行くにしたがってふくらんでいく、なにかとぼけた、ユーモラスな雰囲気—日本人にとっての瓢箪が多少それに似ているかも知れないが、カリカチュール紙ほどには厳しく政府を批判しようとしなくて多くの人々にも喜ばれたのだろう、まるで独り立ちしたかのように、洋梨は、ルイ・フィリップ自身を、王室を、政府を、それらを取り巻いて利権を貪る階層を、直接示すことなく表現する象徴として、カリカチュール紙のすみずみまで(最終号の最後のページでは、「九月法」の条文が梨型に組まれている)、さらには、紙面から抜け出して、ステッキの頭、パイプの装飾、子供達の落書きとなって、町中、国中に溢れることになるのである。

洋梨の成功は、おそらくフィリポン自身の思惑を大きく上廻ったと考えられるが、この時期以降のカリカチュール紙で、検察当局の追及を免れるためにとられた手段は他にも多い。うち二つについて触れておこう。一つは、国王の「似姿」を描く際のある工夫であり、もう一つは、「判じ絵紋章」(*armes parlantes*)の使用である。前者についてまず述べる。

「カリカチュール」35号が、真正面から左官職人=国王を描いた肖像は、「王の似姿は権力の最もわかりやすい象徴としてであつて、王個人を攻撃する意図は皆無だった」という主張にも拘わらず、王の尊厳を傷つけるものとして断罪された。ではどのようにすればいいか。王を描いたつもりはないと言い逃れができ、しかも、誰にも一目瞭然王だということがわかればよい。

初期にあつてカリカチュール紙の画家達は、35号の2枚の石版画の場合のように、王を正面から、そうでなくともはっきり横顔がわかるような角度から描くことが多かった。聴衆を煙りに巻く手品師(28号=1831年5月12日)、七月革命一週年記念行事で、玉葱で目を擦って泣いてみせる元国事代理人(*lieutenant général*

du royaume 革命直後、王座に就く前のルイ・フィリップの地位)(39号=1831年7月28日)などがそうだし、31号(1831年6月2日)で「自由女神」の影におびえる王も、フィリポンによる説明文ともども、検察当局を挑発するかのように、正面を見ている。それが同じ年の10月頃になると、まるで一ヶ月半後の有罪判決を予感したかのように、もっぱら後ろ姿で描かれるようになるのだ。

51号(1831年10月20日)の石版画では、カジミール・ペリエをはじめとする閣僚達の御する馬車「国家」が、誤った運転のため今まさに奈落の底に飛び込もうとしているが、数人の男達の中でただ一人向こうを向いている人間、それがルイ・フィリップである。

61号(1831年12月29日)の1枚はグランヴィルの作品で、軍神マルス、商業の神マーキュリーの像に見守られながら、食卓を囲む男達がいる。彼らはその顔から、カジミール・ペリエ、陸軍大臣スルト元帥、バルト司法大臣などと特定できるのだから、一人だけこちらに完全に背を向けている会食者がいる。この場合もそれがルイ・フィリップで、本来なら上座に座り、正面から描かれるにもっとも適わしい地位の人間が、背中からしか描かれていないということが逆に、その人物を直ちに特定させる印となっているのである。むしろその際も、顎髭、腹、姿勢によっては、ふくらはぎといった箇所が、細心の注意をもって描かれていることは言うまでもない。

「判じ絵紋章」(*armes parlantes*=語る紋章)とは、その図柄が、家名、人名、家の起源由来、また、該当する人物の性格、地位などを、謎かけのように暗示している徽章で—「洋梨」をその一種と考えてもいい—、カリカチュール紙の石版画にはっきりした形で登場するのは、しばらく前、30号(1831年5月26日)の1枚においてだった。左側には民衆の紋章が、右側には中道政府—*le juste-milieu*—の紋章が置かれている。前者は、フリギア帽、束桿(ソッカン *faisceaux*)、鎌、処刑のための街灯、武器ともなればバリケードともなる敷石といった、いわば革命を伝統的に表す小道具が並べられ、それ全体が(七月の)太陽の光に囲まれ、下には、「貧困、常に、貧困」という銘が読める。

それに対して中道政府の紋章は、よく商人の被る帽子、つい最近、群衆を追い払うためにはじめて用いられた放水器のパロディーである浣腸器などからなる。銘は、「戦争よりは、恥辱の方がよい」(*Mieux vaut la honte que la guerre*)だが、これは時の内閣首班カジミール・ペリエが、ロシアの専制政治と戦うためにフランス政府の干渉、援助をポーランドが求めてきた時、それを断るため議会で行った演説中の文句とされる。

同じ30号には、「紋章という扮装がもし読者に喜んで頂けるのなら、実り豊かな対照を生み出すこのア

アイデアを、さらに続けていこうと思う」という抱負も述べられるが、実際には、51号(1831年10月20日)に付随的に見られる、ある貴族院議員の家紋(時代遅れの性格を示すミイラなどが描かれている)を別にすれば、紋章が活発に現れるのは、しばらくたってのことである。

63号(1832年1月12日)の画面一杯に置かれた、王太子の紋章を眺めてみよう。

孔雀が羽を広げた盾を取り囲むように、玩具の馬馬、兵隊、折り紙の軍帽、鶏、軍隊の太鼓、オリーブの一枝などが描かれ、全体を見下ろすように、王太子のあだ名の一つである「虹」がかかっている。下部の銘は、「心の貧しきものは幸いなり。天国はその人達のためにあればなり。」という聖書の文句をもじって、「…王国はその人達の…」であり、さらに紋章全体が、「大きな坊やの紋章」(「大きな坊や」Grand Poulot は当時王太子に与えられていたあだ名の一つ)として提出されている。同じ号の説明文を含めてどこにも、「世継ぎの王太子オルレアン公」と名指しされていないが、前年8月のベルギーでの対オランダ戦争で、また特に、12月、リヨンでの絹織物労働者達の反乱鎮圧のため投入された多数の軍隊の指揮官として派遣された王太子に対する揶揄であることは一目瞭然で、この石版画は、皇室費その他のための出費故の重税に悩む民衆を表したもう一枚の石版画、また、ルイ・フィリップの金銭への執着を暗示した文章と共に、即日差し押さえられ、その後の裁判で統括責任者フィリポンは、これまでの刑に加えてさらに、投獄6ヶ月、罰金2,000フランの有罪判決を受けることになる。この場合には、紋章使用も当局の追及をかわす効果を持たなかったわけである。

81号(1832年5月17日)では、30号の場合と同じ意匠に従って、王の紋章、民衆の紋章が左右に並べられている。前者は、市民の王を標榜するルイ・フィリップがいつも被っていたシルクハットを中心に、いつも持ち歩いたステッキと傘が交錯し、中央の盾には、「より少額の皇室費…個人の自由、書く自由…法外な高給職の廃止…」といった、日頃カリカチュール紙が主張する項目がすぐにも実行に移されるかのように列挙されている。銘は、「憲章は忠実に遵守されるだろう」で、これまた言論規制などによって、1830年の憲章に背いている政府に常々向けられている言葉である。

民衆の紋章の方は、3個のブリオッシュパン、雲雀の肉を焼鳥のように串刺しにしたもの2本などからなり、銘は、「働きながら生きよう」で、これは、前年末にリヨンで起こり、軍隊によって鎮圧された騒乱の標語、「働きながら生きるか、戦いながら死のう」の一部である。

67号(1832年2月9日)に、「貪欲なる臣下達」を寄せて以来、しきりにカリカチュール紙に登場し始め

たオノレ・ドーミエも、その「カリカチュールの著名人」シリーズの最初の5作で紋章を活用している。うち第三作に当たる86号(1832年6月28日)での、スルト元帥の肖像を眺めよう。

ドーミエの肖像画では「スー…」とだけ記されたニコラ・スルト元帥は、ナポレオンの信頼の厚かった軍人だが、カジミール・ペリエ内閣でも陸軍大臣を務め、6月7,8日パリに布告された戒厳令に際しては総司令官でもあった。となると、戒厳令明け最初の86号での、スルト元帥の登場は、読者にきわめて大きなインパクトを与えたに違いない。事実図版説明文にフィリポンは書いている。『現在パリに住むという幸運に恵まれている皆さん、このご面相をご覧ください。その上で、このような顔が陸軍大臣の顔であり、その大臣があなたの住む町を戒厳令下に置き、その戒厳令があなたの命を、あなたの友人の命を、このような出来の顔をした方の言いなりに委せることを、望むか、望まないか、お聞かせ下さい。返答は自由です。但し、然りとお答え下さい。なぜなら、権力相手の冗談はご無用、とりわけ、戒厳令下では…!』

図柄の上半分は、カリカチュールの読者にはかなり馴染みだったはずの、いかつい容貌をした元帥の胸から上の肖像で、肩章、たすきのついた軍服—元帥服だろう—を着ている。但し、軍帽は被らず、でこぼこ頭の地肌がでている。

画面の下、ほぼ三分の一が紋章に当てられているが、その中央では、彼の「信心深さ」を示す火のついた蠟燭と元帥の指揮棒が十字架を形作り、革命派の三色たすきとブルボン家の紋章の百合を合わせ持つ盾、三色リボン、白いリボンそれぞれをつけた軍帽、陸軍省と書いた大臣鞆、また数字の書かれた袋が左右に一つずつ見えるが、これは、銘の「俺の(元帥)給金は命と引き換えでなければ渡さない」とともに、彼が大臣としての報酬の他に、元帥としての給料をも頂として受け取り続けたことに対する非難である。

好評を博した「著名人シリーズ」は、その後、散発的にはあるが第五作(127号、1833年4月11日=検事総長ペルシル)まで数え、それぞれに、我々がスルト元帥について見たような「判じ絵紋章」がついている。但し、ドーミエは、その後も終刊近くまでカリカチュール紙上に戯画肖像を載せ続けるが、そこでは紋章の使用は見られない。紋章に対する人々の好みが薄れたからか、それとも、ドーミエが、この種のイメージの助けなしでも、充分対象を描き切れるという自信を持ち始めたのかも知れない。

カリカチュール紙に登場する人物は、なんらかの特徴を思い切り誇張されている。それは、言論統制に熱心だったダルグーの巨大な鼻、法務大臣バルトの斜視といった身体に関するものだったり、ロボーの浣腸器、

スルトの蠟燭、デュパンの古靴といった物だったり、ルイ・フィリップの「ヴァルミー、ジェマップ」という言葉だったりする。こうした特徴がいくつか一ヶ所に集められたのが、上で見た「判じ絵紋章」だったのである。人物とその特徴、属性、これはゼウスと雷、ポセイドンと三つ叉の鉾、ヘラクレスと棍棒といった古代の神々、英雄のケースを想起させないだろうか。グランヴィルの傑作「オリンポス山の偽りの神々」(98号, 1832年9月20日)を待つまでもなく、カリカチュール紙には、毎回入れ替わり立ち替わり、偽の神々が登場していたのである。

4) 後期 (1832 年末頃～1835 年 8 月の廃刊まで)

戒厳令の後、政府の言論規制、共和主義運動に対する弾圧は益々厳しさを増し、やがて、1834年4月、リヨン、サン・テチエンヌ、そして特にパリで数日間にわたって見られた騒乱、市街戦、弾圧ドーミエの石版画「トランスノナン街4月15日」で有名一、莫大な数の逮捕者、そしてその裁判の準備、また、1835年7月のルイ・フィリップ暗殺未遂事件を経て、カリカチュール紙に挟み込まれる石版画も、これまでに見られなかった過激さを帯びるようになる。いくつかの特徴を拾い上げてみよう。

擬人化された「カリカチュール」自身が、鳥の羽のついた帽子を被り、爪先が思いきり反り上がった靴を履いた道化の姿で、画中にしばしば登場する。あたかも今や、口絵に姿を見させているだけではおさまりがつかないかのようだ。例えば125号(1833年3月28日)の彼は、思い切り弓を引いて今しも矢を放とうとしている。既に数本の矢が、ダルグーの鼻、デュパンの口に突き刺さっているが、今度の狙いはその方角からすると、どうやらルイ・フィリップその人らしい。絵の下の説明文には、「さあ、ダルグー、おまえの鼻だ、さあ、バルトロ(法務大臣バルトのあだ名で、いつも斜視のためにからかわれている)、おまえの目だ、さあ、お前たちみんな、たらふく儲けた連中よ、覚悟しろ」とある。

158号(1833年11月14日)は、「国家という馬車」という題だが、犬とも馬とも見分けのつかない奇怪な獣に変身した大臣達の牽く馬車が、ぬかるんだ道に入り込んでいく。馬車はお定まり通り梨の形をしていて、これまた梨型の腹をしてそっぽを向いたルイ・フィリップの横で、王太子と思われる人物が手綱を操ろうとしている。道標には「シェルプール街道」とあるから、どうやら一行は、つい先頃王位を追われてイギリスに亡命したブルボン王家と同じ道程を辿ろうとしているらしい。大勢の人間が歓声を挙げて彼らを送り出しているが、とりわけカリカチュールのはしゃぎぶりはただ事ではない。

他にも、王や大臣達を閲兵するカリカチュール(202号)、フィリポンの顔をしたカリカチュールが、厨房でたくさんの洋梨料理を作っている図もあれば(162号)、猫いらず売りの少年もカリカチュールの服装をさせられている。少年の担いでいる長い竿には、二匹の鼠と一緒に、ペルシル、王、ティエールの死体のみじめに吊る下がついている。少年の足元には、毎号の口絵に見られるハリネズミもお供している(213号)。

道化の服装をした、そして時にはフィリボン自身の顔をしたカリカチュールが自ら登場して、権力者達を懲らしめたり、彼らに勝ち誇った笑いを向けたりするという図柄には、やはりこの時期にしばしば見られる「自由女神」、「フランス女神」の勝利が描かれた石版画と通じるものがある。

166号(1833年6月6日)では、今しも噴火した火山の口から大火炎、黒雲が吹き上がり、岩石が飛び散り、熔岩が流れ出している。火炎の中央には、LIBERTÉ「自由」という文字が立ち上り、荒涼とした山麓では、人々が逃げまどっている。大きな袋—カリカチュール紙上での暗黙の約束では、王がなによりも大切になっている自分の財産ということになるのだが—を背負ったのはルイ・フィリップ、その後を追う背の高い男は王太子だということもすぐわかる。絵は、「一七八九年火山の第三回噴火」と題され、さらに、「この噴火は、世界の終わりの前に起こり、あらゆる王座を揺すぶり、あちこちの王政を破壊するだろう」と付け加えられている。フランス大革命で生まれた火山が、1830年の噴火以後活動を休んではいるが、やがて大噴火を起こし、「自由」が決定的に勝つはずだという趣旨である。

152号(1833年10月3日)では、印刷機の隙間に入り込んでしまったルイ・フィリップらしい男が、今にも潰されかかっているし、チェス競技を描いた160号(11月28日)では、フリギア帽を被った駒「自由女神」の前で、王が「詰み」を宣言されている。163号(12月20日)に描かれた二頭立ての馬車の上には、右手に手綱、左手には槍を持った自由女神がすっと立ち、車を進めている。車の後ろには、ダルグー、スルト、タレーラン、洋梨達が必死に取りすがり、なんとか車の進行を止めようとしている。幼い「自由女神」の力強さを描いた18号によく似たこの絵のタイトルは、「太陽の運行を止める方が容易だろう」である。

233号(1835年4月23日)は、2週間後に開廷の迫った、前年4月の騒乱事件の裁判を取り上げている。画面中央で、翼を生やした老人クロノス(時間の神)が、貴族院議員の制服を着た人間を次々と、法廷に引きずり出している。それを受け取っているのは正義の女神だろうか、焼きごてで彼らの額にASS(Assassinは、殺人者の意味)と烙印を押している。その光景を、高い台座の上に陣取ったフランス女神が監視している。

タイトルは「裁かれる裁判官達」(Jugement des Juges)で、やがて開かれる裁判の結果がどうあろうと、いつか必ず行われる真の裁きでは、裁いた者達こそが裁かれると、作者は訴えているのだ。

しかしながら、こうした、道化カリカチュールの優位、自由女神の勝利の図が、1832年の戒厳令以来益々強められた規制、弾圧という、現実の厳しさを裏返しにした表現であることはもちろんで、いためつけられている自由女神、フランス女神、民衆の受難といった図柄もまた、この時期には数多くみられる。

91号(1832年8月2日)では、オリーブ山で悲痛な祈りを捧げるキリストの代わりに、フリギア帽を被った自由女神を置いている。天に現れる天使達は、七月革命、もしくは2ヶ月前の騒乱での犠牲者で、ルイ・フィリップに指揮された軍隊が、足早に近づいて来るのも見える。

164号(1833年12月27日)では、王冠を頂く「フランス女神」が、巨大な洋梨型の鉄の塊を鎖で足につけられ、額に手を当て愁いに沈んでいる。この徒刑囚を、看守の服装をしたスルト、ロボー二人の元帥が見張っている。しかし説明文は、「フランスは無期徒刑に服しているわけではない。遅かれ早かれ、自由がやってきて彼女からその鉄の塊をはずすはずだ」と氣勢をあげる。

171号(1834年2月13日)は、ブリュドン¹⁾の絵、「正義と復讐に追いかけられる罪」のパロディーで、自由女神を刺し殺したばかりの短剣を握ったままのルイ・フィリップに、「正義」と「復讐」が天から襲いかかろうとしている。

最後にこの時期の石版画に特徴的な要素の一つとして、死、殺害、といった激しい道具立てがこれまで以上に頻繁に用いられていること、また、グロテスクな姿態が、政治家や王にしばしば与えられているといった点について触れておこう。

前者については、ブリュドン¹⁾の絵のもじりが既にその例だが、127号(1833年4月11日)でも、ルイ・フィリップが短剣を右手に、今度はペローの「青髭」よろしく、手足をがんじがらめに縛られた「自由女神」を今まさに突き刺そうしている。

212号(1834年11月27日)では、当時人気の高かった芝居の主人公、悪漢ロベール・マケールに扮した王が、大臣職、札束で鳥小屋からおびき寄せた鳥達の首を大きなサーベルで次々に切り落としている。11月10日にできて13日には崩壊した文字通りの「三日内閣」への風刺である。

これらはいずれも直接ルイ・フィリップを対象にしているが、与党政治家達に向けられた、同じように激しい図柄も少なくない。一つだけ例を挙げよう。207号(1834年10月23日)は、その頃、「国家の恩人」に感

謝するための殿堂に様変わりしたパリのパンテオンに葬られるという栄誉を、有力政治家達に、早々と、生前から与えている。と言っても、殿堂の前に設けられたいくつもの絞首台に、ダルグー、ベルシル、スルトらがあられもない恰好で吊る下げられているのだ。中でただ一人、ティエールだけが必死に抵抗しているが、彼の服からは大臣袍がずり落ち、たくさんの貨幣が溢れ出ている。

こうしたグロテスクの追及は、後期を通じてグランヴィール²⁾がしばしば試みた、政治家達のさまざまな動物達への変身にも、また既に触れたドーミエの戯画肖像画にも見られるが、これについては、それぞれの作者の個性が大きく関わっていると思われるから、改めてとり上げることとしよう¹⁶⁾。

注

- 1) 普通名詞「カリカチュール」(caricature)をそのままタイトルにした定期刊行物は、我々のそれ以外にもいくつかある。1839年以後数年間日曜日毎に刊行されたもの、1871年籠城中のパリで発行禁止になったもの、1880年から1904年まで刊行された漫画週刊誌がその主なものである。

なお、本稿で我々が典拠として用いるのは、「フランクフルト・アム・マイン国立/大学図書館」所蔵のカリカチュール紙ひと揃いを、Belser出版社(Stuttgart/Zürich)がマイクロ・フィッシュ化して出版(1988年)したものである。マイクロ・フィッシュに付けられた解説書によれば、上記図書館所蔵のものは、創刊以来週を追って刊行された初版ではなく、おそらくは1831年末以降に、あらたな注文に応じて印刷された再版であり、初版とは多少の異同がある。1831年末以後のナンバーについては、初版であるか否かについて特に触れられていない。なお、創刊予告号、予告ポスターなど、再版なるが故の欠落については、ゲッティンゲン大学の助力によって補充したとある(解説書41ページ。これについては、III, 2でも触れることになる。)

マイクロ・フィッシュ版の他に、町田市立国際版画美術館所蔵のもの(フランクフルトの場合と同じ版と思われる。但し、写真版ではない)を、同美術館のご好意で数回にわたって見ることができた。改めて感謝の意を表したい。

本稿(1/2)は全体のほぼ半分であり、残り半分(2/2)は次号に掲載の予定である。

- 2) 例外的に、パリ市戒厳令(1832年6月7, 8日)の際、6月14日から28日へとび、また、162, 163, 164号は、本来発行されるべき日の翌日金曜日

- に出ている。廃刊直前の号数については、2/2 でふれる。
- 3) 52号 (1831年10月27日) 冒頭の記事に、「我が大判紙使用の同業者諸君」(nos confrères du grand format) といった表現がある。また同じ記事で、検察庁長官の言葉として、カリカチュール紙が、「黄色い紙の…」と言われているところから見ると、紙の質も劣っていたらしい。
 - 4) 七月王政末期 (1846年) 日刊紙の平均印刷部数統計では、もっとも多いのは「世紀」(Le Siècle) の32,885部、「ジュルナル・デ・デバ」(Le Journal des débats) でも9,305部である。また、ラムネーの日刊紙「未来」(L'Avenir) は、1831年5月現在で、予約購読者数1,500人だった。(Bellanger 他: *Histoire Générale de la Presse Française*, tome II, P. 146/p. 105)
 - 5) 1831年11,12月、リヨンで暴動を起こした絹織物労働者達の賃金は日給18スー (18時間労働)、つまり1フランに満たなかった。(Ernest Lavisse: *Histoire de France contemporaine*, tome v, p. 65)
 - 6) マイクロ・フィッシュ版の解説者は、フィリボンが、一方では、カリカチュール紙によって進歩党よりの自由主義路線の共鳴者を、他方では、オーベル社に展示、自由販売する石版画によって、共和主義的な急進路線の共鳴者を引き寄せるといふ、二重戦術をとっていたと主張している。
 - 7) Ségolène Le Men: *Les Armes Parlantes dans «La Caricature» en 1832*, 1995年6月10日パリで行われた国際シンポジウムでの講演「固有名詞のエクリチュール」から。
 - 8) マイクロ・フィッシュ版解説書 41 ページ参照。
 - 9) 予告号の筆者が読者に約束する画家達とは、ヴィクトール・アダン、ベランジェ、シャルレ、ドゥカン、グランヴィル、グルニエ、アンリ・モニエ、ピガルだが、この他にも、アシル・ドヴェリア、トラヴィエス、オーベル社のための仕事を通して育ったと言ってもいいドーミエなど、数多くの画家が登場する。
 - 10) 実際の購読料は、年52フランだった。(本稿 II. 参照)
 - 11) 本稿 IV. で触れた「扉つき版画」(dessins à porte) である。
 - 12) 55号付録の裁判記録に見られる、フィリボンの陳述から。
 - 13) 弁護人ブラン、被告人フィリボンそれぞれの反論の根拠を箇条書にすれば次のようになる。ブラン: ① 権力を批判することは、憲章によって保証されている権利である。② 権力批判は、抽象物である権力に具体的な姿、形を与えなくて

は不可能である。③ そのための最良の手段は、誰にでもすぐそれとわかる国王の顔で権力を描くことだ。④ その際描かれたものはあくまで王の「似姿」であって、王の「個人、人格」ではない。「似姿」は一個人の所有物ではない。⑤ 王以外の人間の似姿、例えば誰か大臣の似姿では、誰にもすぐわかるわけではない。またその大臣に必ずしも責任があるわけではない。⑥ 描かれた絵は、王の「似姿」であって「王」そのものではないから、王に対する侮辱には当たらない。⑦ カリカチュール紙の石版画が行った批判の内容自体 (七月革命の約束の不履行)、正しいことである。⑧ 同じ主張、それを主張するための同じ方法が、これまで10回にわたって裁判にかけられ、その度ごとにカリカチュール紙側の勝訴に終わっている。このようにすでに決着のついている問題を蒸し返すのは、法律的にも違法である。/フィリボン: ① 「真理、真実」というものは多種多様で、検事の主張する真実と全く同じ資格で、フィリボンの真実もある。② 私は「王を侮辱した」と非難されるが、とんでもないこと。あの「バリエードの王」に最も近いのはこの私である。③ 私が、「王を侮辱した」とされるのは、王自身ではなく、検事たちをはじめとする、王の配下の気にさわったからである。④ 私が権力を「人格化」したのは、そうしなければ私の鉛筆が権力を描けなかったからである。しかも私の用いた「似姿」は誰もが知っているものであり、特定の誰の所有物でもない。また、私は、私の描いたのが「王」でなく、「権力」であることをはっきり示すために、体は王の体でないものを用いた。つまり、私は、権力の犯した行為を批判しようとしたのであり、王の行為を批判しようとしたのではない。立憲王政のもとでは、王には責任がないのだから。⑤ 私の行為は、これまで既に何度も無罪になったものであり、イギリスなどでは堂々とする行いが認められている。⑥ 私は、世の中を見て、余りのひどさに憤慨の余り批判したのである。憲章の保証する権利を行使したのである。⑦ もし私の絵が王に似ているからといって罪になるのであれば、単なる梨を描くことも罪になるはずである。(ここまできたフィリボンは、その場で、鉛筆をとり、王のやや下膨れした顔、少しそれを誇張した顔、ぐっと洋梨に近付けた顔、洋梨そのものに目鼻の線をつけたもの、という4種類の絵を描いてみせる。本稿 IV. 3 参照) ⑧ 私の裁判がこのように無駄に続いている間にも、多くの人たちが空しく時間を費しながら自分たちの裁判が開かれるのを待っている。その間、彼らの妻、子供たちは飢えに泣いている。⑨

私は、真理女神から借りた鏡で真実を映し出しているのだ。良心に誓って、少しも私にやましいところはない。

- 14) と言っても、フィリポンが直ちに投獄されたわけではないらしい。これについては、次号 (2/2) で検討の予定。
- 15) マイנツのグーテンベルグ美術館での (Guten-

berg-Museum Mainz 1981 年 4 月 20 日～6 月 7 日), また, その他の場所で開かれた展覧会のための解説書 138 ページ参照。

- 16) 印象的な最後の数号の石版画についても, 改めて触れることとする。

(1/2 了)